展景

季刊

No.97

Spring 2020

季刊　展景97号

目次

とこしなえ〈俳句〉……新野祐子　4
松の記憶〈短歌〉……布宮慈子　6
炎鵬関〈短歌〉……市川茂子　8
秋化粧〈短歌〉……小野澤繁雄　10
新しいパソコン〈短歌〉……河村郁子　12
冬の星〈俳句〉……谷垣滿壽子　14
東京歌会（第八十五～八十七回）……16
〈那須通信42〉朱色のくつ……加藤文子　22
〈薫風颯々17〉雪国から環境と教育と未来と……神村ふじを　28
対詠　ごきげんいかが？　PART 73……小野澤／布宮／河村　34
前号作品短評A……38
前号作品短評B……40
エッセイ教室「清紫会」の作品より
　転居してから……市川茂子　42
　欅……松井淑子　44
「清紫会」だより……47
無二の会短信……48
編集後記……52

今号のイメージ／そら豆

とこしなえ

新野祐子（にいの）

冬の蝶窓辺に父の死顔照らす

父が逝き中村哲逝き虎落笛（もがりぶえ）

ドライアイス煙る亡骸冬日たゆたう

クリスマス形見のような『クオレ』繰る

読初めは『天、共に在り』共に泣く

＊中村哲著『天、共に在り――アフガニスタン三十年の闘い』

冬銀河横たう水路とこしなえ

あの世より雪降らぬ里憂うかな

いたち驚破（すわ）ペットの猫に捕られけり

蛋白源奪い合う冬　鳶鴉

モノクロの夢のあわいの冬菜美（は）し

松の記憶

布宮慈子（やすこ）

ひそやかにトトロの帽子と名づけたる大きい二本の木がなくなりぬ

近隣のアパートの隅にありし木は檜葉だつたらうか切り株残る

電線の邪魔になるほど高くなりその木は根元から伐られたり

ヤマさんの住んでゐたころ手入れする牡丹は大輪の花を咲かせき

ヤマさんが引越してのち伐られたり玄関の植込みに牡丹なき鬱

長いこと重機の音す家壊しある朝つひに松の木伐らる

大木は羽州街道を見続けてきたはず松の記憶は永遠

松の木がなくなり隣地は均されて駐車場となる　記憶の上に

にんげんは都合によつて大木の松も切り倒すちからを持てり

雪少な雪少なとてたまに降る雪はうつくしすべてを覆ふ

炎鵬関

市川茂子

校庭の古(ふ)りし囲いの山茶花は取り払われて高き塀立つ
青天の空にあやなす欅大樹絵画に見ゆるビルの間に
年末になれば数の子味付けしひとりの卓の中心に置く
中天に昇る初陽を浴びながらあと何回の初詣ならん

正月を酌みかわしいる三人なりかくなる縁(えにし)いつまでつづく
年明けて賑わう街の地下道の端あゆみゆく煽られながら
初場所に組手の足を持ち上げて炎鵬(えんほう)関は勝ち越し決める
ことさらに小柄な力士の炎鵬関勝ち名乗り受く面輪さわやか
東京の桜開花の標本木老木ながら境内にあり
道すがら臘梅咲ける塀内の静かな庭をしばらく見さく

秋化粧

小野澤繁雄

刈入の済みしばかりに田のあいをただ走る人長く見ている

人の住む少なき町に歩み入る向うから先に挨拶がくる

晴れて風決まりのような訓練日煙体験に笑顔がそろう

ふくらむを止められざりしコキア畑かたちのままに末枯れておりぬ

みちのはば隔ててここにすれ違うかすかながらに少女はうたう

ひとつところに三十年を住むところ終らんとする日々の一日か

モミジにも種類はあれどことごとく言葉によりて秋化粧まで

小走りに犬に合わせてゆく人の影の大小も関係にして

満天星（どうだん）の枯れ具合でもそのあとの秋の紅葉が決まると人は

花は小葉は大なるを好むよう青桐がもみじし始めている

新しいパソコン

河村郁子

とりたてて不具合なけれど買ひ換へる年末商戦の「パソコン一式」

若者より起動が遅いと言はれれば気重く感ずる「お待ちください」

Dynabook より LAVIE に替へて慣れるまでを脳トレなると思ひて挑む

Windows 10 の機能は同じでも操作の進化をりをり嬉しむ

音のなき画面の動きを見つめゐる沈黙の刻刻（こっこく）を楽しみとなす

ディスプレイ一行のみのワープロに漢字の変換初めてなせり

通信教育（つうしん）の教材案の提出は MS-DOS と言はれて奮起

手引書（マニュアル）の無きころなれば量販店の売り場に通ひ質問しきり

パソコンに変りて Windows 95　XP　7　10 と相俟ち来たり

ＮＥＣにお客様登録済ませ機能の習得志すなり

冬の星

谷垣滿壽子

明日試験祈りて見上ぐ冬の星
友は今如何に過ごすや都鳥
投函のついでに眺む冬桜
よき香放つ枯葉の山に潜る子等
底冷えや幾度も緑茶淹れ替へる
寒灯のぽつと消えけりバス通り
靴音の忙しげに行く年の暮
積雪は如何ばかりかと雪女郎
服喪てふ身の置き処年用意
初鏡口紅の色少し変へ

東京歌会（第八十五回）

二〇一九年十一月二十一日（木）、会場・アカデミー向丘二階和室。詠草は各二首八首。出席者四名（市川茂子、小野澤繁雄、林博子、松井淑子）。

秋の日に果樹園地帯を駆け抜ける「ツール・ド・ラ・フランス大会」ことしも　布宮慈子

ツール・ド・フランスがあることから、駆け抜ける、はランナーでなく自転車。果樹園地帯、で（フランス原産の）洋梨ラ・フランスにもある合点がある。二首目（…上山〈かみのやま〉に人ら集ひて自転車を漕ぐ）と合わせて地域性も明らか。直線的な詠みぶりで、歌に勢いがある。ことしも、で例年の行事であることもしれる。

かみ合わぬ入れ歯口内にきしみいてうつうつとする一日暮れたり　市川茂子

歌はそのまま。事情は切迫したものなので読んで納得がある。こういうことはあるようで、こういう一日にもなる。入れ歯の悩みはいろいろ聞いている。

いつの間に車内なべては若き人われより若き天皇初めて　小野澤繁雄

上句、これはわかるという。年齢、それも昭和生まれの（人の）歌。結句、音数から、天皇も初、でもいいか。

美容院のわかものたちとほほゑめばおばあちゃん役と孫の役かな　中川禮子

これも、年齢の歌。わかものたちとおばあちゃんが登場する。二句を、わかものたちに、とすると若者たちはスタッフで、わかものたちと、だと、スタッフにかぎらずお客さんの可能性も出てくる、と。下句でも、おばあちゃん役に孫の役かな、もありうる。

東京歌会（第八十六回）

十二月十九日（木）、会場・アカデミー向丘二階和室。詠草は各二首八首。出席者四名（市川茂子、小野澤繁雄、林博子、松井淑子）。

詮無きかな　足もと危うき夫に添い落葉踏みゆく陽のあたる道

林　博子

詮、は「為（セ）む」の借字。手段、方法のことという（『新明解国語辞典』第五版）。また、しただけの効果、とも。夫に（寄り）添って、（いっしょに）落葉を踏んでゆく（ことしかできない）。陽のあたる道、に救いのようなものがかんじられる。添い、にも支えるばかりでもない関係がみえる。

雨あとの路地に散り敷く庭の落葉深紅の一葉ひろい持ち来る

市川茂子

一葉（ひとは）。下句はそのままでよくわかるところ。上句、路地に面する（家の）庭木の落葉が路地に（まで）舞い散ったものと読んだ。整理して、二句を路地に舞い散る、などとし、庭の落葉も木の種類を出したらどうか、ということになった。深紅、に合わせて、楓とか桜でもいい。情景は浮かぶ。

あたたかく強い人でありました　ふつくらとした母のてのひら

布宮慈子

母を看とったひとの歌。強さは、歌にもある。上句で人柄を、下句で具体を云っている。ひらがなが目立ち、ひらがなは眼で読むにしても時間をかけることができる、それは口に出されたことばのようでもある。深い情感があるという。

庚申塔はむかしのみちの三差路にありなれていま自治会が世話

小野澤繁雄

庚申塚、の方が聞きなれた感じがするという。むかしのみち、つまりは街道筋だったりする。三差路、というのも、馬頭尊もそうだが道しるべにもなっていた。ありなれて、が少し読みにくいが、あり慣れて、か。結句、自治会が世話、で今の歌になっている。

東京歌会（第八十七回）

二〇二〇年一月十六日（木）、会場・文京シビックセンター四階シルバーセンター和室二。詠草は各二首八首。出席者四名（市川茂子、小野澤繁雄、林博子、松井淑子）。

残さるる人の悲しみ行間に滲む欠礼葉書とおき凩

林　博子

喪中欠礼の葉書の多い年がある。年齢もあるようだ。ここでは饒舌な葉書ということはない。とおき凩、は心象風景だという。残すことにも悲しみはあるなと今はおもう。

母逝きて四十日が過ぎるころケーキを選ぶケーキ屋さんに

布宮慈子

選ぶ、には種類があることと、ある種気持ちの余裕がある。生活が戻ってきたということか。四十日が必要だったということでもある。ケーキはお母さんの好みだろうか。歯切れよさ。真実味がある（歌）。

少しよき具材を食ぶる新年のならわし永く引きずりながら　　市川茂子

普段と違った食材がスーパーの棚にそろうのも、年末からだ。食卓の人数が増える家もある。上句には、作者の把握がある。一方で、それがそれぞれの家族のものながら、ならわし、同時に、（永く）引きずりながら、とネガティブな（消極的な）見方もみせている、ところ。今の新年を云っているようなところがあり。面白い。

朝（あした）から飛行機雲みるうれしさよ単純にして地上の者ら　　小野澤繁雄

飛行機雲をみることには単純にうれしいというようなところがある。結句は、地上の（に生きる）われらということ。わかりやすいという。飛行機は人為そのものだが、飛行機雲はそれを超えるものだろう。

（報告：小野澤繁雄）

〈那須通信42〉

朱色のくつ

加藤文子

玄関を掃いている時、なんの気なしにくつ箱の戸を開けたら埃っぽかった。せっかく見かけたので、きれいにしたくなる。

毎日玄関はそうじするのに、どうして隣り合わせのくつ箱まで気が及ばなかったのか不思議だ。くつ棚のジャリジャリをぬぐうのに、取り出したくつを玄関外のアプローチぞいの鉄のスタンドに並べる。外に出したらよけいに汚れが気になった。普段履かないのは埃が被り、中に虫が入っていたり、カビたりしている。

これはいけない。この機会にくつも磨いておこう。

最初に手にしたのは、ecco（エコー）というメーカーの朱色のくつ。埃にまみれ、発色も定かでない。

父がミュンヘンで盆栽の講座をたのまれ、母と一緒に私も同行することになった。レセプションでも通用しそうな履きやすいくつが必要になって、あわてて購入したものだ。

どこへ行くのもスニーカーですんでいたので、皮ぐつを買うのは久々だった。

二十年以上も前のこと。

当時那須に引っ越したばかりで、どこに行けば条件に合うようなくつが手に入るのか見当がつかなかった。

黒磯駅周辺をうろうろしていたら、裏道にようやく小さなくつ屋をみつけた。取り揃えは少なかったが、適当なのを買うことができた。履き心地良好、ずっと履いてきたような感じがした。

ミュンヘン到着から翌日、同地在住の旧友ハンスが会場のホテルまで会いに来てくれた。芭蕉をはじめ、山岳信仰、修験の世界やマタギなど、日本を独特の目線で紹介してきたジャーナリストである。

若い頃からたびたび日本を訪れ、取材を重ねている。滞在先のMさん宅と私の実家が近かった縁で知り合いになった。

そんな彼が講座が始まるまでのあいだ市内を案内してくれるという。ホテルから車を五分ほど走らせた先にあるオリンピック競技場を見学していたら、突然雨が激しく降り出した。

傘の持ち合わせがなかったので、みんなずぶ濡れになって近くのティーハウスに飛び込んだ。

手入れの行き届いた植物に囲まれた、窓の大きな建物だった。

雨が厚いガラスをとめどもなく伝わり落ちる。雨水にコーティングされた窓から見る風景は、外

界を遠くに感じさせた。

紅茶で冷えきった体を温めながら、やむのを待った。

父はおかまいなく日本語で話しかける。日本語のできないハンスは英語でこたえる。どちらもヘイチャラ。そのままずっと話している。どこでどう意味が通じていたのかわからなかったが、おもしろい話題には二人ともククッと笑う。オカシかった。

遅い午後からはじまった父の講座には、ヨーロッパ各地から多くの盆栽愛好家が参加し、盛況に終わった。

父はいつもぶっつけ本番、原稿も用意しないでたくさんの聴衆を前にしても上がることなく、内容豊かにはなしができる。終わった後もケロっとしている。

小学生の頃から盆栽が大好きで、育てていたという。長年の友、盆栽のことだから、ひとりでにはなしが湧き出てくるのだろう。

ecco のくつは水たまりに何度も浸かり、皮の弾力も失って新品の装いからすっかりくたびれたものになった。

くつ下はくつの朱に染まり、夜のレセプションの時も濡れたままだった。

これが親子で行く最初で最後の海外になった。ジャングルの奥地までも、ひとりで取材に赴いた野性児のような体力の持ち主のハンスも難病を発症し、数年前他界した。

退色した朱色にクリームを塗って磨きをかけながら、雨の日のミュンヘンのことを思い出していた。

くつ箱の中は光沢を取り戻したくつが並び、見ちがえるようになった。

春がくる　＜ウスキナズナ＞　　撮影：小沼寛

〈薫風颯々17〉

雪国から環境と教育と未来と

神村ふじを

山形は雪国である。だが、今年の山形に雪はまったくない。1月末時点で左沢（あてらざわ）は積雪量0cm。寒中にも関わらずこんなに雪がない年はまず経験したことがない。

お隣の寒河江市で、1／31～2／2の3日間、「やまがた雪フェスティバル」が開かれたが、この陽気ではせっかくの雪まつりも盛り上がりに欠けたようだ。

会場になった山形自動車道寒河江SAのすぐ近くにある最上川ふるさと総合公園に雪はまったくなくて、話によると月山の麓にある西川町の仁田山というところからようやく雪を掻き集めて開催に漕ぎつけたとのことだった。

雪下ろしをしなくていい分、楽なことは楽なのだが、早くも今夏の農作物の出来を心配する農家の人もいて、雪不足は、県内各地の農業や観光にも影響を与えているようである。このような状況に、地球温暖化、異常気象がまったく影響していないと言い切れるはずがない。

トランプ米大統領は、化石燃料重視の政策を追求し、地球温暖化対策の国際的枠組み「パリ協定」を離脱している。また、米航空宇宙局（NASA）における地球温暖化ガス調査活動予算を削減しているとも聞く。

2018年に米政府の関係省庁がまとめた報告書には、「温室効果ガスの排出増加が歴史的なペースで継続していることを受け、今世紀末までに米経済の年間損失額は数千億ドルに達する見通しである」と書かれているそうである。

気候変動が米経済と米国民の健康に深刻な損害を与えていると警告しているにもかかわらず、トランプ大統領は、報告書の内容を「信じない」と公言し、中国や日本、アジアの国々など、諸外国が温室効果ガスの排出量を削減する必要があると、まるで人ごとのような態度を見せている。

昨年9月、スウェーデンの環境活動家グレタ・トゥーンベリさんが国連で演説した。その「How dare you!」に象徴される彼女のスピーチ内容は強烈だった。

「all you can talk about is money and fairy tales of eternal economic growth. How dare you!」

「あなた方大人の話といったら、お金のことと夢物語のような経済成長のことばかり。いったい何を考えているの?」英語に疎い筆者でも、スッと理解できるフレーズである。

彼女は国連のあるニューヨークへ向かう途中、カーボンニュートラルヨットで大西洋を横断したそうだが、ヨットの帆に「Unite Behind the Science」という言葉が掲げられた。「科学の基に団

結する」という彼女の強い信念を表している。

彼女はトランプ大統領に対しても同様のメッセージを発信しており、彼に科学にもっと耳を傾けるよう警告している。そして、事実をきちんと認めて対策を実施してほしいと訴えている。そうなっていないから、安心して学校に戻れないから、今ここにこうしていると……。

国連で行われた気候行動サミットにおいて、サミットの会場入り直後、ほんの数分だけだったが二人は同じ場所に居合わせた。その際に、彼女のそばを通り過ぎる大統領をグレタが睨みつける様子が全世界に報道された。

彼女の主張に見向きもせず、木で鼻を括ったような態度に、怒りとも取れる彼女の眼。このグレタとトランプの出会いのワンシーンは、地球規模の環境問題が直面する課題を一瞬で表したような場面でもあった。

弘法大師は「六大は無碍（むげ）にして常に瑜伽（ゆが）なり」と説いた。

自然界そのものを表す「地」「水」「火」「風」「空」の五大と人間の精神を表す「識」を合わせて六大とし、無碍とは何も障害が無く自由自在、瑜伽とはヨガの意に通じ、心身の統一を意味する。

仏教の言葉なので分かりにくいところがあるが、要するに、大自然に起こる様々な現象は、人間の精神と連動し、それが相互に融合したり分離したりバランスを取りながら、世界を、世の中を、

社会を形づくっていくということらしい。

人間の識大（意識）に関わる部分が五大を犯しているとすれば、空海上人に言わせれば、人間界の狂気が自然界を犯し、危うい世界をつくっているということになる。

トランプ、習近平、金正恩、プーチンといった世界のトップに立つ指導者たちが、自国の利益を最優先に考え、なりふり構わず他国を追い落としていくような、自国第一主義、覇権主義、ポピュリズムといった考え方に縛られていて、私の眼にもトップリーダーたちが単なる「Selfish Giant」のように映ってしまっている。それをグレタさんの眼はしっかり見抜いているのだ。

アフガニスタンで非業の死を遂げた中村哲医師の「国を守るのは武器ではなくて水と緑だ」という理想の社会の実現に向けて努力している人たちの傍らで、一国の大統領が決断すれば、敵国の司令官をいとも簡単に抹殺できるという現実。六大無碍とははるかにかけ離れたこの社会。こんな社会はお大師様にもチコちゃんにも叱られる。

安倍総理が提唱する持続可能な社会。不確定要素に満ちた未来をどう生き抜いていくのか。その提唱の裏にある教育にかけられた期待の大きさを感じる半面、誰も経験したことのない未来の姿、子どもたちの姿に大いに不安を感じる世の動きである。

加えて、子どもたちの未来の姿に直接関わる教育分野で大きな国の動きがあった。昨年末に国が打ち出した「GIGAスクール構想」というものである。

政府は12月に民間からの支出も含めて26兆円規模の経済対策を閣議決定した。その一つとして盛り込まれたのが、学校のICT（Information and Communication Technology：情報通信技術）環境の強化をねらった「GIGAスクール構想」である。

簡単に言うと、学校の校内LANを10ギガの高速大容量に整備し、義務教育段階において、令和5年度までに、全学年の児童生徒一人一人がそれぞれ端末（タブレット）を持てるようにするというものだ。

教育現場では、ICT教育の重要性は認識しているものの、学力向上、生徒指導、いじめ、不登校、働き方改革等々課題山積で、教師たちがICTに付いていけない現状がある。ブラック企業とも揶揄（やゆ）される学校。ここに来て、教師、指導者の確保が大きな課題となっている。

しかし、ICT革命はまったなしで進もうとしている。そのように進めていかないと国際社会を生き抜く日本の子どもたちは取り残されてしまうという危機感が透けて見える。

教育に携わる者として、子どもたちの未来に不安を持ってしまうというのはあまりよろしくない。子どもたちの未来に夢と希望を与えるのが教育の使命だと思っているからだ。

だから、もちろん子どもたちがICT抜きで生きていけるとは思っていない。思っていないが、人間が生きることの根っこにある何か大切なものが置き去りにされていくような気がしてしまうのは、年を取ったせいなのだろうか。

参考：気候変動に関する報告書「第4次全米気候評価第2巻」（米政府）の発表に伴う報道（BBC NEWS JAPAN 2018/11/27付インターネット版ニュースを参照）

対詠　ごきげんいかが？　PART 73　〈2019－2020〉

小野澤繁雄　K
布宮　慈子　N
河村　郁子　O

墓洗ふ　師走はじめの小春日に新入り姉との話つもりて　12月6日　K
出てもどる団地構内そのみちに枝伐る音の朝よりきこゆ　12月10日　O
真水なる中村哲さん帰りきぬ言葉の壊れてしまつた国へ　12月16日　N
庭師なす剪定終へし庭すがし核も麻薬もかくにありたし　12月22日　K
イブの日のあしたの庭に赤い帽高さ揃って低学年の生徒(こ)ら　12月24日　O
棰(かんじき)を売る店ありて上町の羽州街道に南天ひかる　12月30日　N
大晦日(おほつごもり)の21時小学生が受験合宿より帰宅せり　12月31日　K

2020年

新年はあい直しする園に出てしり合いにまたメグちゃんにもや　1月4日　O
志津ちやんの葬儀に出れば久々の同級生とともに拝みぬ　1月10日　N
元旦のポストに入る年賀状ほのかに嬉し　喪中なれども　1月12日　K
境遇はいろいろなれど同じ家(や)に内飼いの犬外飼いの犬　1月21日　O
光りゐる二つのまなこが走り来る左(さ)の前足を着かぬ猫にて　1月25日　N
シリウスゆ冬の大三角形たどり大いぬ子いぬ座亡き犬(ラッキー)いづこ　1月27日　K
マルちゃんでなくメグちゃんでもなくハルちゃん犬の識別は飼主による　1月30日　O
春なのかまだ冬なのか夕空を西へと向かふ五羽の白鳥　2月5日　N
わが庭の紅梅いちりん咲き初むる立春の朝と決めゐるらしも　2月8日　K
蠟梅が終りつつあるを前置きに庭の女性(ひと)とも話す梅の花　2月11日　O

雪国に雪のなければよろこびは少なしと思ふ春が来たとて　2月16日　N

白雪に色映すなく散り初むる紅梅見つむ詫びるがごとく　2月22日　K

カレーパンにバーモントカレーもあるまちのパン屋さんにしお八つ買いおり　2月26日　O

ともかくも鯖のカレーを食べむとす感染者の数ふえつつあるも　3月4日　N

前号作品短評A〈小野澤〉

●秋深し忽然と子は消えゆきぬ　谷垣満壽子

忽然、を思わずしらべてしまった。辞書（『新明解国語辞典』第五版）では、突然何かが現われたり消えたりすることを表わす、として、消える例を載せている。忽然として。句では、戸惑いがみえる。突然に二女を亡くしてしまったと同号短信にある。秋深し、には人事がつづくようだ。タイトルの句は、次の通り。

秋の夜や逆縁に唯痛哭のみ

始まりから終わりまでをみてしまった、とじぶんが、長男をなくしたときにおもったことだが。よくないことである。逆縁という言葉のむずかしさもある。ことばでする深い嘆き。ながくつづくことになる嘆き、とその日一日の現れ。

ひもじさも今は懐かし終戦日
むら雲に隠れ現れ今日の月

●三日月が風雨に揉まれ弱い私　新野祐子

弱い私、に立ち止まってしまう。強い私、では句にならないようだ。なぜだろうか。もっているものがあるからだ、とひとまずおもう。上二句はひとまず大自然。ただし夜、それも満月でないところ。そこから、弱い、に同調感がある。弱い私、はそう出てこない表現。

台風一過デメテルの帰り来よ

デメテルはデーメーテールでギリシア神話の女神のこと。豊穣神であり、穀物の栽培を人間に教えた神とされる。古典ギリシア語で「母なる大地」を意味する、ともいう。句は一時に失われたものの回復（復旧）を祈るものだが、その視野は広い。この年規模のおおきな台風の襲来があった。被害についてもしるところ。調子のよさもある。調子のよさは次の句にもある、

ふるさとの誰そ彼淡し赤まんま

ふるさととのかかわり方、ということでもある。赤まんま（犬蓼）、で秋の季語。

●アキアカネ朝の冷気に止まりゐて時間を共にす起き抜けの吾（あ）と　布宮慈子

アキアカネ（秋茜）は、俗に赤トンボ。朝の冷気にうごきを止めていたか。こちらも、起き抜けでまだそう動けないところ。同時代性ということばがあるが、ここでは同時間性のようなものを感じたのだろうか。当然ながら秋の歌でもある。嘱目としてのアキアカネ、という感じもない。共振がある。

澄んでゐる空気の中を行くときにわれも澄みたり透明な秋

秋の説明でもあるような。澄み、と透明な、が重なりあっていて、ある種反復感がある。余り足していないところ。こういう歌は連作のなかに置かれるといいようだ。短歌としての調子もいい。呼吸のリズム。

わが影はわれを離れずそろそろと付いてきてをり夜の散歩に

前号作品短評B〈慈子〉

●明け方の路地は濃霧に覆われてゴミ出しまでを中に入りゆく　　市川茂子

住宅街に早朝、濃い霧が立ち込めている。ゴミ出しというありふれた行いなのだが、霧の中に入っていく様子はどこか不思議な世界への入り口のように思えてくる。意図したかどうかは別にして、事実とすれすれの感覚を味わうことができる歌だ。

庭見えて鉢植えのバラ丈高くほつほつ咲けり秋から冬へ

よその庭に見える鉢植えのバラの花がぽつぽつと咲いている、秋から冬へ変わっていこうとしている今。そんな何でもない写生の歌だが、少ない花の数から季節の変化を感じさせ、味わい深い。冬へと向かう寂しさと心構えを自分に言いきかせているようにも取れる。「庭見えて」の「て」を使わないように、もうひと工夫するといいかもしれない。

●長々と鰐のかたちの浮袋腹みせている九月の庭に　　小野澤繁雄

夏が過ぎ、庭に取り残された浮袋はワニの形にふくらんだままひっくり返っている。もう九月なのだ。他家のことだろうが、どこかやるせない気分を含みながら、子どもが遊んだ夏の余韻を表現している。

ささえられ存続中の館に観る議論の中の「ニューヨーク公共図書館」

「存続中の館」とは、なんとか閉館にならずに存在している映画館なのか。そこで「ニューヨーク公共図書館 エクス・リブリス」を観たのか。いや「館」は映画の中の図書館のことだろうか。どちらにも解釈できるように思う。これは、フレデリック・ワイズマン監督によるニューヨーク公共図書館に関するアメリカのドキュメンタリー映画。カメラは図書館の内側に入り、いかに予算を確保するのか、いかにデジタル革命に適応してサービスしていくかを議論する幹部たちの姿を見せる。ボランティアも多い。「世界中の図書館員の憧れの的であり、ニューヨーク有数の観光スポット」というのもうなずける映画だった。

●遠く近くに眺めて心安らげしかの千曲川の無残映さる　　河村郁子

「台風あとさき」と題した一連。作者の思いがこもっているからか、最初の七音は気にならない。昨年十月に起きた千曲川の決壊は新幹線の車両センターにも大きな被害をもたらした。その映像を見ながら、過去に心穏やかに川を眺めた記憶を思い起こしたのだろう。ちなみに千曲川は長野県を流れる川で、新潟県に入ると信濃川と呼び名が変わるそうだ。

政（まつりごと）に治山治水は基本理念インフラ日本（ジャパン）の面目ありや

いまの政治に危ういものを感じながらも叱咤激励しているのか。治山治水は災害列島として基本中の基本なのに、ダムに頼ろうとする利権争いのようなことが行われて久しい。熊本の地震や千葉の台風、大変な被害があったのに住民に対するケアは十分とは言えない気がする。

エッセイ教室「清紫会」の作品より

転居してから

市川茂子

転居してから、初めての冬を迎えることになって、色々と準備しなければならない物がある。

それは引越しの時に、多くの物を不用品にしたので、いざという時になって不自由な思いをしているからだ。洋服ダンスや和ダンス、大きな箱などは捨ててしまった。気が付いたら、衣類などはその都度、押し入れから出し入れしなければならない。

座っていて手の届くところに必要な物があればそれでいいという生活など、なまけ者が夢を見ているようなもので、それは自分のことだった。

今まで使っていたコタツも大きいからと捨ててしまった。寒くなったので、あわてて買いに行って宅配で届いたが、組立式になっているので説明書を見てもよくわからない。また頼んで組み立ててもらわなければと思って、ひとまず部屋の隅に寄せて置いた。

コタツ布団まで捨てたので、新しいものを用意しなければと、ドタバタしている。年末には何かと物入りになるのに、色々な生活用具まで不用品にしたことなどを反省しながら過ごす。そうこうしているうちに、思い直してコタツを組み立てたりパイプハンガーも組み立て、部屋の隅にしつらえて重宝している。

何事も必要にせまられてのことである。外出も多くなり、ふだんは運動したり散歩する日課もなく過ごしているので、外に出ると足もとがふらついたり、もつれたりすることがある。

この間は天気が良かったので、バスに乗って出かけた。二、三ヵ所で用事をすませ、帰りのバス停近くまで来たら、バスに乗り込んでいるのが見えた。間に合いそうだと思って小走りになって急いだら、つまずいて前のめりに転んでしまった。

すぐに起き上がれず、近くに居た方が手を貸してくれて立ち上がったが、乗るのをやめて息をととのえながら一休みして、次のバスに乗って帰った。

その夜はあまり痛みもなく静かに休んでいればと思いながら、朝になって見たら、左手の親指のあたりが内出血のように少し色が変って腫れていた。病院に行ってレントゲンで見てもらったら、左手の親指にひびが入っているとのことで、すぐに固定されてしまった。

年末の掃除や片付けること、仕上げなければならない物など、あれやこれやと脳裏をかすめる。何もかも不便になってしまって、途方に暮れる。

今、このときに、こんなことになって、遣る方なく身から出た不覚と言いながら、苦笑している。

欅

松井淑子

昨年の台風十九号の豪雨による各地の河川の氾濫を知るまでは、台風でこわいのは、何よりも風だと思っていた。

というのは、あれは太平洋戦争の敗戦の二、三年後のことだったと思うが、疎開先で住んでいた家の屋根を吹き飛ばされたことがあったからだ。と言っても母屋の大屋根ではない。台所に付け足した物置小屋のトタン屋根であるが。バリッという大きな物音とともにいきなり天井が明るくなり、見上げると灰色の空が広がっていた。雨が降っていないのがせめてものことであった。

その頃、当時進駐していた米軍の意向だったのではないかと思うが、サマータイムが取り入れられたり、台風に名前が付けられたりしており、うちの物置小屋の屋根を吹き飛ばした台風は、たしかデラという名だったかと思う。

台風十九号の折も、その前の十五号が房総半島に風による大きな被害をもたらしたことがあったせいか、気象庁は風に対する注意をしきりに促していた。私もデラ台風を思い出し、ベランダに出しっ放しの物干し竿や箒（ほうき）、塵取（ちりと）りなどを家の中に取り込み、さらに窓ガラスに補強用のテープを貼ろうとしていたら、

「うちの窓ガラスは二重になっているから、その必要はないですよ」

とマンションの管理人氏に言われたので、これはやめにした。

夜が更けるにつれて風が強まり、街路樹の欅（けやき）の枝の揺れが大きくなってゆく。心配しながらも、いつか眠ってしまったらしい。

パトカーのサイレンの音で目が覚めた。カーテンの透き間からのぞくと、うちの斜め前の欅が倒れているらしいのが目に入った。一本根こそぎ倒れたのだろうか。もっとよく見たいものだ。そう思ったが、風の強さにさすがに窓を開けるわけにも、ましてベランダに出るわけにもいかない。そのうち清掃車のような車が来て三、四人の作業員が降り立った。何をするのだろうか。見たかったがよく見えないので、あきらめてまた寝てしまった。

翌朝、目覚めると、雲一つない快晴である。昨夜の欅はどうなったかと、早速、見に出掛けた。見ると、私の胸の高さほどの位置で三本に枝分かれしているうちの、真ん中の幹と思える一本が折れたらしく、その部分に鋸（のこぎり）が入れられ、枝葉もろとも無くなっていた。

地面に多少散り残っている葉っぱを拾い上げてみた。葉の大きさは長さ約十センチ、幅約四センチ、形は先の尖った長楕円形でまわりにぎざぎざがあり、葉脈が十三、四本通っている。しげしげ

と眺めながら、欅といえばどこにでもあり、よく知っているありふれた街路樹だと思っていたが、これまで葉の形はおろか、花も実も知らなかったことに気がついて、我ながら驚いてしまったのだった。

「清紫会」だより

◆第185回　二〇一九年十一月二十一日（木）、会場・文京区立アカデミー向丘二階和室
〈提出作品〉林博子・辞書ものがたり／松井淑子・欅

◆第186回　十二月十九日（木）、会場・文京区立アカデミー向丘二階和室
〈提出作品〉市川茂子・転居してから／林博子・満天星、その想い出

◆第187回　二〇二〇年一月十六日（木）、会場・文京シビックセンター四階シルバーセンター和室二
〈提出作品〉なし

無二の会短信

◆初詣に行ったばかりと思っていると、カレンダーは二月に移っている。初夢は見たけれど忘れてしまったり、何事も三日坊主の横着者で年を重ねている。「三日坊主も、十回やれば一ヵ月になる」、そんなくり返しもいいではないかと言われるが、今に至っては時を刻む時計の針や日付などは頭上を駆け抜けてしまう。地球の回転が早送りになっているような気がして、何事にも追いつかなくなってきた。面倒なことはやり過ごして、残された時間を大切にしよう。

市川茂子

◆新型コロナウイルスの感染拡大で、この一、二週間が瀬戸際だという（専門家会議）。下の子と同居を始めて三ヵ月、子は見習いから正社員になったが、残業続きという働き方は変わらない。じぶんが感染して、うつしたらいけないと引きこもりのような生活に戻ってしまった。近所を散歩して、しる犬にあうくらいのことによろこびがある。メグちゃん（茶の柴）は無口というか、反応らしいものがないので、こちらから近づくしかない。そこがいいと思っている。公園の多くの年よりがメグちゃんに声をかけている。

小野澤繁雄

◆年度末になっていよいよ卒業式を残すのみと思っていたら、新型コロナウイルスなどというとんでもないものが日本を襲ってきた。子どもをウイルスから守るために春休みを前倒しして休校に入ったが、今度は家に居られない子どもたちを学校で見ろとのお達しである。日々変わる国の態度に市町村も学校も右往左往している。先の見えないコロナウイルス。対応策も薬も含めて何か特効薬はないものか…。

神村ふじを

◆三年前に新調したパソコンだけれど、起動が遅い。最近のは起動も早く使い易いらしい。年末に、パソコン本体にプリンター、下取り付き等々のセールスに乗ってしまった。前のPCはネットに接続せずにWord（ワード）やExcel（エクセル）に使うことにした。パソコンは、強いけれど離れられない朋友である。

河村郁子

◆今年は暖冬と云われていますが寒波がくるとやはり寒いと思います。今年は、次女の急逝で服喪中で、お正月のお祝いごとは何もできませんでした。次女は五十二歳の突然死でした。思いがけず逆縁となり悲しくて悲しみは死ぬまで続くと思われます。唯いただいた命なので大切にすごしてゆこうと思っております。

谷垣滿壽子

◆昨年十二月三日、父が九十歳の天寿を全うした。腎不全だったが、まったく苦しまず逝った。十五年くらい前、私は父の半生を『昭和五年に生まれて』というタイトルでまとめたいと、父から聞き取りをした。さまざまな出稼ぎの話はおもしろかった。父は母と二歳の私を連れて一冬立川で暮らした。小河内ダム建設によって下りて来た人たちに、鍋釜を満載した十銭店を引いて売り歩く仕事をしたのだ。家を新築した人たちは調理用具も新しくするらしく飛ぶように売れたという。砂川闘争の真っ只中だった。私は東京弁ぺらぺらになって帰ってきたそうだ。この話などはもっとも興味深い。聞き取りが中断し、まとめることができなかったのは残念だ。父の葬儀の朝、新聞受けに「中村医師銃撃され死亡」の文字を発見。これまた大きなショックだった。二〇〇一年からペシャワール会員になり、会報の中村医師の言葉の数々に感銘を受けてきた。まだ享年七十三歳。惜しまれてならない。

新野祐子

◆うちから徒歩十五分ぐらいのところにある中学校の校庭の草地に、見慣れない鳥がとことこ歩いていた。ヒヨドリよりやや小さく、全体に黒褐色で、目のところに黒い線があり、目の上とのどは白っぽい。あとで野鳥図鑑で調べたら、どうやらツグミのようである。うちの周りといえばカラスぐらいしかいないので、変わった野鳥を見るとひどく得した気分になる。

松井淑子

◆泉岳寺の方丈様が昨年末にお亡くなりになられた。奇しくも、私と息子・ハルは、方丈様が荼毘に付される前に立ち会うことができ、お参りさせていただいた。驚くほど美しく、静謐な横顔はまさに仏様のお顔だった。そのことを奥様に告げると、「美しい生き方をしたんでしょうね」と一言。方丈様は亡くなる前、各方面に書簡にて二つのことを告げたという。一つ目は、今後の泉岳寺の住職は血縁に頼らずふさわしい僧に跡を継いでもらうこと。二つ目は、住職の妻子は寺で居を共にすることなく、寺の運営は僧侶たちで行うこと。子どもを宿すことなく、何十年にわたり三百六十五日寺を切り盛りしてきた奥様への愛が、方丈様の最後の表明に至ったのだろう。両親がもういない私にとって、菩提寺の方丈様と奥様の存在は大きかった。令和の幕開け、私の中で一つの時代が終わった。

山内裕子

編集後記

◆雪のない冬だった。駐車場の雪かきは一度もしなかった。こんなことは二〇一一年の暮れ、ふるさと山形に越してきてから初めてだ。地元にずっと暮らしてきた人も、こんな冬は見たことがないと言う。たしかに雪による被害はなかったし、除雪にかかる費用も浮いたことになる。しかし、ぼんやりした春を迎えて、果樹は、田んぼは、水は大丈夫なのだろうかと心配になる。加えて、いまの新型コロナウイルスによる自粛ムードである。淡々と日常を生きることがだいじだと、自分に言いきかせているところだ。

◆私事で恐縮だが、母が昨年十一月下旬に亡くなった。九十一歳だった。葬儀は仏式で、お坊さんも葬儀社の人もよくしてくれたと思うが、まず考えることが滞りなく進めることとお金のことなので「これが母との別れだろうか」という思いが強かった。

母の葬儀の翌朝、「展景」の仲間である河内愛子さんが亡くなったとの知らせ。八十九歳。秋ごろから風邪が長引いているとは聞いていたが、こんなに早く…と半ば信じられない気持ちだった。河内さんは一人暮らし。あとで息子さんに聞いたところによると、夜、書き物か何かをしていて倒れ、亡くなったらしい。おそらく苦しまずに。河内愛子さんの葬儀は山形市にある教会だった。牧師さんのお話があり、続いて三人のお別れの挨拶があった。牧師さんの話も心に響くもので、仙台からみえた友人など、それぞれが河内さんとの思い出を静かに語り、わたしは深く感動した。讃美歌もよく知らないながら声を合わせた。故人のお人柄、参列者という立場もあったかもしれないが、河内さんときちんとお別れができた気がする。

仏式では荘厳だが、お経はわからない言葉だ。わかる言葉で送る、お別れを言う。人の心に残るものとして、この違いはやはり大きいと言わざるを得ない。

◆短信で新野さんも触れているが、アフガニスタンでの中村哲さんの死も衝撃だった。帰国した折も忙しい中村さんは、西のほうの講演が多い。それが昨年五月、山形市で講演会があるというので早速申し込んで聴きに行ったのだった。平日の昼間だったので人数はそう多くなかったが、仙台から来た人もいた。みな心待ちにしていたのだ。中村さんが直接発する言葉には重みがあった。質問の時間に出た、貧困からくるケシ栽培などは、いいも悪いも生きている人の営みを感じさせるものだった。ほんとうに残念というほかない。いまインターネットで読めるインタビュー記事があるので紹介する。

「中村哲が14年にわたり雑誌『SIGHT』に語った6万字」

www.rockinon.co.jp/sight/nakamura-tetsu/article_01.html

（布宮慈子）

muninokai.com

上記のサイトでは、フルカラーのオンライン版「展景」を公開しています。

季刊 展景 97号
二〇二〇年三月二十日　発行
編集・発行人　布宮慈子
制作　スタジオ・マージン
無二の会「展景」発行所
山形市上町二―一―七―二〇二
info@muninokai.com

Copyright© 2020 MUNINOKAI. All rights reserved.